

Title	G・H・ミード時間論における「創発」概念の検討： 『現在の哲学』を研究する意義
Sub Title	
Author	岩田, 裕子(Iwata, Yuko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2001
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.6 (2001. ) ,p.90- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	ビューポイント
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20010000-0090">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20010000-0090</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## G・H・ミード時間論における「創発」概念の検討

—『現在の哲学』を研究する意義—

岩田 裕子

社会学が A.コントによって「社会の科学」と定義されて以降、社会学を特徴づけているのはさまざまな認識論的・方法論的視点の存在である。さまざまな視点が存在するなかで、多くの社会学者の間に持たれてきた、社会を検討するための基準には、大別して以下二つの視座があるとされる。すなわち、個人に対して権力を行使するしくみとして社会を捉え、社会とは諸制度、階層システム、そして個人が社会化される文化的パターンの統合体であるとする機能主義的視座と、社会とは過去によって影響を受け、そして過去にも影響を与える諸個人の相互作用であるとする相互作用論的視座である(Joel,1995,pp.166-167)。

この二つの視点を時間論との関連から眺めると、前者の構造機能主義およびシステム論に対しては、この考え方では変化を説明ができないという批判や、時間を所与として扱っているという批判が今日では一般的なものである。しかし、B.アダムは社会理論における時間の哲学的前提の重要性を説いており、時間を変化と恒常性双方において中心的であると言及している。例えば秩序を考える場合、時間的継起的秩序がなければ秩序はありえない(Adam,1990=邦訳 15頁)。アダム説によれば、機能主義と相互作用論との相違は、機能主義が時間への哲学的思考を持たないという点にあるのではなく、機能主義と相互作用論双方それぞれの理論的主張を支える、異なる時間的前提によることになる。

J.H.ターナーは 1974 年に発表した論文のなかで、T.パーソンズの理論には『社会的行為の構造』において確立された主意主義的行為論が一貫して根底にあり、この点においてパーソンズ理論には象徴的相互作用論との近似性があると述べている(Turner,1974,pp.283-294)。また近年、J.C.アレクサンダーのように、「社会システムないし制度に関するマクロ理論家は、個人がどのように行為し、相互作用するかについての仮定を想定し、この仮定はマクロ理論にとってきわめて重要なものである」という点に賛同する立場に立ちながら(Alexander J.C., et al,1987=邦訳 189 頁)、ミクロな行為理論に焦点を当てて考察を行う立場もある。しかし、このように二つの視座を統合しようと試みる立場が多く現れるなか、時間そのものや時間に関わる概念の具体的な検討は行われておらず、自らの背後にある時間の哲学的背景にどれほど配慮しているかに関しては疑問を持たざるを得ない。

後者の相互作用論においては、時間に関する哲学的思考が深められており、継起性、出来事、想起、反省、創発など多岐にわたる概念が用いられている。中でも、特に象徴的相互作用論に

において個々の主体性を保証するものとして意義があるとされ、広く用いられたのは G.H.ミードが独自に展開した創発概念であった。ミードは、哲学的時間を A.ベルグソンと N.ホワイトヘッドから、そして創発を進化論的、発生論的思考を持つ S.アレクサンダーと L.モーガンから継承して考察している。ミードは創発を、一方では「二つ、或いはそれ以上の異なるシステムにおける事物の出現であり、新しいシステムでは以前属していたシステムとは異なる特性をもつものとなる」と定義づけながら(Mead,1932,p.69)、他方では複合(combination)が起こる場合、我々は新しい世界に存在しており、その新しい世界は古い世界と機械論的で因果的な関係はない(Mead,1938,p.641)とし、古典物理学的な時間系に沿う目的論的な因果律を否定する創発論を展開している。ミードは、アレクサンダーとモーガンが展開した進化論的・発生論的思考を、哲学的時間論と絡めながら、人間の精神の発生に対する説明に取り入れたのである。法則性、決定論、可逆性という法則を持つニュートン物理学に対して 1905 年に現れ、絶対的かつ普遍的な空間と時間を消滅させたアインシュタインの相対性理論(Mead,1932,p.42)、ホワイトヘッド、そしてベルグソンの哲学は、ミードに多大な影響を与えた。そして時間に関する論争が盛んであった当時の状況のなかで、ミードは独自の時間論を展開したのである。彼の着眼点は時間が絶対的な独立変数であることを否定し、空間と時間を関係態として捉えることであった。

一方、S.ストライカー、N.デンジンへと続く現代の象徴的相互作用論において明らかなように、時間性をどのように捉えるかという問題は象徴的相互作用論における方法論にも影響を与えている。1960 年代に入り、象徴的相互作用論の方法論議が行なわれ、アイオワ学派とシカゴ学派において方法論的相違が議論されたが、この議論は、ミードの自己概念の実証化を目指し、TST テスト (twenty sentences test) を発展させるアイオワ学派と、反操作主義的方法論を持つシカゴ学派との間の相違に起因するものであり、議論を遡るとミードの理論像をどのように捉えているかに結びついている。この論争もミードの理論の中で述べられている人間行動の自律性と新しい行動の創発をどのように捉えるかに帰着し、象徴的相互作用論の方法における操作・非操作化をめぐる議論となったといえる(Blumer,1969=邦訳 294-296 頁)。このように創発概念は社会理論および象徴的相互作用論学派内の境界を与えるきっかけの一つともなったのである。

ミードの行為論においても、時間や創発の重要性を窺い知ることができる。『行為の哲学』(1938)をひも解いてみると、ミードの行為論のなかで時間と創発がいかに重要な位置を占めているのかが分かる。例えば、ミードは行為を定義するなかで、衝動(impulses)、知覚(perception)、操作(manipulation)、完成(consumption)という4つの位相を定めている。この4位相は有機体に共通して所有されている衝動-完成図式に知覚と操作を加えたものであり、人間の行為は他の有機体では見られない知覚と操作によって、複雑な行為を行うことができると説明される。例えば知覚は、刺激への反応だけでなく反応の結果のイメージをも含み(Mead,1938,p.3)、そして知覚するその対象は離隔的对象 (distant object) であると説明されている。

知覚には、刺激に対する反応態度が含まれているだけでなく、反応の結果に対する予測ということも含まれている。したがって、知覚のなかには、行為のあらゆる諸要素、すなわち刺激や、態度として現れる反応や、反応の後に現れ、過去の反応からの予測として生じる最終的な経験などがすべて含まれるのである(Mead,1938,p.3)。

ミードが説明する行為は、開始から終了に至る行為の経過全体が、一つのまとまりを成すものとして描かれている。すなわち、行為には目的があり、その目的になる対象の操作という契機によって推移するものだと説明されるのである。行為者によって世界は一定の分節化が行われ、その結果、時間と空間が分離して物が物として、物的事象として存在するようになる(小川,1992,35頁)。ここにおいて、創発は、衝動-完成図式から、衝動、知覚、操作、完成という人間特有の図式への発展に寄与する。創発により、人間は隔離の対象を知覚することが可能となり、過去と連関するイメージを作ることができるのである。このようにミードの行為論においても時間と創発は不可欠なものであり、ミードの行為論を考察する場合においても、時間と創発を視野の中心に入れる必要があると考えられる。

ところで、ミードが用いた創発概念は、その後の理論家により、機能主義への対抗概念として積極的に用いられた。例えばミードの思想を方法論的に体系づけ、象徴的相互作用論の立場を確立しようとした H.ブルーマーの相互行為の説明を見ると、その理論の中に創発がいかに色濃く用いられているかを窺うことができる。

相互行為というものは(これこそが人間の相互作用の本当の形態だと私は考えるが)、その生成の過程で、構成され組み上げられていくものだけということである。これがために、人間の相互行為は、可変的な軌跡をもつものとなる。…ここに示した人間の結びつきの様態は、相手の行為にてらして、自分の行為を各人が指示していく、流動的なひとつの過程というものである(Blumer,1969=邦訳142頁)。

このブルーマーの言及からも分かるように、創発が機能主義社会理論への対抗概念として用いられたために、創発概念自体について、ミードが哲学的にいかなる思索を経て自らの理論に用いたのかという点に関しては、後継者の間においても等閑に付されていた感がある。

ミードの思考を継承する諸理論により等閑視された創発概念に関わるミードの思考の経緯は、ミードの著作である『現在の哲学』(1932)において綿密に説明されている。ミードの代表作である『精神・自我・社会』(1934)は、これまで多くの社会学者によって研究されてきた。しかし『精神・自我・社会』は講義録という形式であるがゆえに、ミードの思想や主張が包括的に述べられるあまり、ミードがいかにして時間や創発を説明しているのかを詳細に把握することは難しい。そこで『現在の哲学』を綿密に読み込むことにより、時間に対してミードが辿った思考を捉え、その後に展開されてゆく社会理論に大きな転換点を与えることとなった創発

を、ミードがどのように説明し、展開したのかを知ることができると考えられる。

『現在の哲学』の冒頭でミードは「現在は過去と未来とを包含している」として現在の性質を定め、「世界は出来事の世界である」と記し、時間の流れを出来事の関係であると捉える、ミードの基本的姿勢の表明から始める(Mead,1932,p.1)。ミードは出来事と出来事との間の関係を連続性と創発によって説明し、現在の社会的本質は創発のなかに生じるものである(Strauss,1956,p.330)とする時間論を展開したのであるが、このようなミードの時間論の考察は、『現在の哲学』のなかで古典的物理学、相対性理論、ベルグソン、ホワイトヘッド等の思想を踏まえて行われている。

現在はつねに未来に向かって破られていくものであり、過去はつねに新しい現在から再解釈され続けるものである。過去にあった諸要素を部分としながら、過去にはまったくなかった新しいものが生じる(小川,1992,23頁)。このような創発および時間が『現在の哲学』のなかでどのように説明されているかを検討することにより、ミードが展開した行為論、役割取得理論に新しい視点を与えることができると考えている。ニュートン物理学から相対性理論へという時間論の転換期にあったミードが、ベルグソンやホワイトヘッド等の哲学をどのように継承し、後に続く社会理論に強く影響を与えた創発論を展開したのかを、『現在の哲学』を用いて検討することは大きな意義を持っている。私はミードが展開した時間論と創発概念を考察することにより、ミードが展開した諸理論およびミードの影響を受けた諸理論を再検討することが可能になると考えており、今後は『現在の哲学』を出発点として、ミードにおける時間と創発の問題を研究したいと考えている。

#### 【引用文献】

- Adam,B.,1990,*Time and Social Theory*,Cambridge:Polity Press. (伊藤誓・磯山甚一訳『時間と社会理論』法政大学出版部,1997年)
- Alexander J.C.,Giesen,B.,Munch,R.,and Smeiser,N.J.,(ed.),1987,*The Micro-Macro Link*,Berkeley:University of California Press. (石井幸夫他訳『ミクロマクロリンクの社会理論』新泉社,1998年)
- Blumer,H.,1969,*Symbolic Interactionism -Perspective and Method* ,New Jersey:Prentice-Hall,Inc. (後藤将之訳『シンボリック相互作用論—方法とパースペクティブ—』劉草書房,1991年)
- Joel,M.C.,1995,*Symbolic Interactionism*,New Jersey:Prentice-Hall,Inc.
- Mead,G.H.,1932,*The philosophy of the present*, Murphy,A.E.(ed.),Chicago:The University of Chicago Press.
- ,1938,*The philosophy of the act*, Morris,C.W.(ed.),Chicago:The University of Chicago Press.
- 小川英司,1992『G.H.ミードの社会学』いなほ書房。
- Strauss,S.,1956,*The Social Psychology of George Herbert Mead*,Chicago:The University of Chicago Press.
- Turner J.H.,1974,"Parsons as a Symbolic Interactionist:A Comparison of Action and Interaction Theory".*Sociological Inquiry*,44(4):283-294.

（いわた ゆうこ 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程）